7月5、6日 あばれ祭

能登の祭りシーズンの先陣を切って宇出津のあばれ祭が7月5、6日に開催された。昨年は初日に強い雨に見舞われたが、今年は好天でにぎわいを見せた。5日、宇出津港いやさか広場の前で、5本の大松明が燃え上がり、40数本のキリコが乱舞した。

祭り2日目、6日は、酒垂神社と白山神社の2基のあばれ神輿が海や川、そして火の中で壊れるほど激しく暴れ、7日未明に八坂神社に入り宮した。

この祭りは約350年前に始まったとされる。激しく暴れ、京から勧請した牛頭天王の神恩に感謝を表す。疫病の流行に対する暑気払い、つまり祇園祭の系列に属していながら、能登半島独自の文化「キリコ」も活躍している。

この祭りには能登半島の歴史が、タイムカプセルのように詰まっている。

船田新一さん（宇出津新）

キリコの「ナカフク」の張り替えを続け60年

寒冷紗を貼ったナカフクに和紙を載せ、位置を確認する船田さん

作業場には、キリコの胴にあたる「ナカフク」がずらりと並んでいた。

菓子店を営む船田新一さん（81）＝宇出津新＝は約60年にわたって、宇出津のあばれ祭のキリコのナカフクやぼんぼりの貼り替えを行っている。

今年のナカフクの貼り替え作業は祭り本番の1か月以上前、5月下旬に始まった。今年は14町内が船田さんに貼り替えを依頼。昨年の祭りは大雨に見舞われたため、今年は特に多くのナカフクが持ち込まれた。

船田さんがナカフクの貼り替えを始めたのは、20歳ごろ。手先が器用で細かい作業が好き。絵や書に長けていた船田さん。一時は美術学校への進学も考えていたが、父親から「成功するのは一握り」と言われ、進学を断念。家業の菓子店を営むかたわら、趣味で日本画を描くなどものづくりを続けてきた。そのうち、周囲の勧めもありこの仕事を始めた。

手先の器用さだけではなく、絵画などで培われた美術的なセンスも仕上がりに影響している。宇出津のキリコのナカフクには、漢字3文字の浮き字が描かれているのが特徴。この3文字は下から見上げた時に美しく見えるよう、3文字とも大きさや縦横のバランスがそれぞれ異なっている。船田さんはこの浮き字も制作する。

浮き字は墨で描いた文字を基に、楮（こうぞ）の手すき和紙を重ねた厚紙で立体化する。船田さんは「文字の力の入れ方やかすれ方は、実際に墨で書かないとわからない」と話す。美しさにこだわる船田さんを頼って、珠洲など町外からも字の制作依頼があるという。

浮き字制作のような目立つ仕事だけではない。ナカフクに貼る紙は大きな一枚の紙ではなく、半紙を四つ切りにした小さな和紙を段を違えて貼り合わせて作られたもの。紙を貼る作業は祭が終わったあと、例年9月ごろから始められる。注文があってもなくても、毎年約20本分は紙を継ぎ準備する。一番時間のかかる、地道な作業だ。

2日間にわたり激しく担がれるキリコ。紙の強度を増すため、下地として寒冷紗（かんれいしゃ）を貼る。建築や表具に使われる寒冷紗を用いることで、叩いても破れない頑丈なナカフクに仕上がる。寒冷紗を貼って乾くのに半日、さらに紙を貼って半日を要するため、この作業もいちどきに仕上げることはできない。

大きな紙や寒冷紗を貼る作業は、一人ではできない。要所要所で息子の佳之さんが手伝う。

時間と人の手のかかる仕事を、家業を営みながら続ける理由は「使命感と誇り」。この仕事について「祭りを裏方として支えている」「男冥利（みょうり）に尽きる」と語る。船田さんは「依頼のあった町内に無事納めることができ安心した」と今年の作業を振りかえった。

かつては、子どもたちがナカフクを梶川できれいに洗い掃除して、船田さんのもとに持ち込んだ。キリコに関わる作業が子どもたちの楽しみだったそうだ。戦時中は、ナカフクに国威を鼓舞する字が並んだという。船田さんの言葉からは60年分の歴史の重さが感じられた。

祭りを支える手仕事

①仕事場の全景②古い紙を剥がし、のり付けする③一人でできない作業は息子の佳之さんと進める④シワーつなく貼られた和紙

⑤外された浮き字は、町内ごとに重ねて置かれていた⑥浮き字は、工作用の糊を使う⑦浮き字を貼り付ける。糸を通しての補強は行わない

⑧戦時中の大橋組のナカフクの文字。「輝国威」とある⑨祭礼委員会から大松明（たいまつ）の御幣（ごへい）の制作も依頼されている。いやさか広場のキリコ用5本と、あばれ神輿向けの2本。